

●特集／アカデミック・リンク松戸完成記念

Feature Article / Commemorative issue on the completion of Academic Link Matsudo project

園芸とランドスケープと図書館—アカデミック・リンク松戸完成記念座談会の記録

Horticulture, landscape and library: Record of the roundtable discussion after commemorative lectures marking the completion of Academic Link Matsudo project

倉重 祐二¹・大野 暁彦²・田草川 みずき³・國本 千裕⁴・小林 達明⁵・¹新潟県立植物園²名古屋市立大学大学院芸術工学研究科³千葉大学大学院人文科学研究院⁴千葉大学アカデミック・リンク・センター⁵千葉大学大学院園芸学研究院KURASHIGE, Yuji¹,ONO, Akihiko²,TAKUSAGAWA, Mizuki³,KUNIMOTO Chihiro⁴,KOBAYASHI, Tatsuaki⁵,¹Niigata Prefectural Botanical Garden²Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City University³Graduate School of Humanities, Chiba University⁴Academic Link Center, Chiba University⁵Graduate School of Horticulture, Chiba University

2021年11月7日に開催されたアカデミック・リンク松戸完成記念オンライン講演会に続き、千葉大学園芸学部キャンパス・戸定ヶ丘百周年記念ホールにおいて、以下のメンバーで座談会「園芸とランドスケープと図書館」を行い、アカデミック・リンク松戸の意義・課題、将来性等について討論した。本記事は当日の意見交換・質疑応答の記録である。

新潟県立植物園長 倉重祐二、

名古屋市立大学大学院芸術工学研究科准教授 大野暁彦、

千葉大学大学院人文科学研究院准教授 田草川みずき、

千葉大学アカデミック・リンク・センター特任准教授

國本千裕

司会：千葉大学附属図書館松戸分館長 小林達明

小林●それでは座談会を始めたいと思います。前半の講演では倉重先生から、植物学と古典のテキスト、それをつなげる最新のゲノム科学という非常に興味深いお話をいただきました。大野先生からはコモンズ・つながるというキーワードから自然を生かした接点づくりのお話をいただきました。どうもありがとうございます。

さて、松戸分館はわが国唯一の園芸専門大学図書館という

特徴があります。さらに、今回みなさまのご寄付でランドスケープに配慮した空間という特色が加わりました。千葉大学全体では、アカデミック・リンクの理念のもとに図書館と教育研究のリンクを強力に推進しております。アカデミック・リンク松戸分館は、理念に「コンテンツとフィールドと学習の近接」というものを掲げています。

本館のアカデミック・リンクは「コンテンツと学習の近接」ということですが、先ほどお話がありましたように、園芸学部の場合はフィールドが大事だということでフィールドも入っているわけです。それをどのように進め、今後何を生み出していくのかというのが課題になっていると思います。今回できたアカデミック・リンク松戸は、国立大学の一学部としては非常に異例の施設整備だと思います。大変恵まれたものを作っていただいたと思っています。

これからいかにその可能性を引き出して、十分に活用して利用をしてもらうかということが大切だと考えています。今日は園芸学部に関わりのある暖かい心を持って見守ってくださるような、そういう外部の方々を集まっていたいておりますので、ぜひ外からのご意見をお伺いしたいと思います。今日の座談会には、先ほどお話いただきました、倉

重先生と大野先生に加えまして、本学アカデミック・リンク・センターの國本千裕先生それから、人文科学研究院の田草川みずき先生のお二人に来ていただいています。視聴者の方々は「アカデミック・リンクって一体なんだい？」という状態だと思いますので、まず國本先生からアカデミック・リンクについてご紹介をいただきたいと思います。國本先生の専門は図書館情報学です。よろしくお願いいたします。



國本●私の方からは『アカデミック・リンク松戸』をどのように作ってきたか、そして「アカデミック・リンクってそもそも何なの？」ということ、皆様にご紹介しようと思います。ここからは、スライドを用いて説明をさせていただきます。

『アカデミック・リンク松戸』は今、学生さんから見ると「図書館」という扱いだと思えますけれども、これについては、いくつか補足説明をしたいと思えます。まず「アカデミック・リンクって何？」に対する1番目の答えは、確かに「物理空間としての千葉大学附属図書館松戸分館」です。建物の名称プレートにも「アカデミック・リンク松戸」と書いていますので、施設全体、物理空間のことを指します。ですがもう1つ実は、アカデミック・リンク松戸は「学習支援コンセプト」である、という回答もできます。

千葉大学では、2011年から全学で「アカデミック・リンク」という学習支援コンセプトを掲げてきました。これは、生涯学び続ける基礎的な能力、知識活用能力を持つ「考える学生の育成」を目標に「学習とコンテンツの近接」…つまり、ただ学習場所を提供するだけではなく、学習コンテンツや、それから、人による学習サポートも実現していくという試みです。今、スライドの右側に、三角形と丸が3つ出てると思えますけれども、この3つによって学生たちが「自ら学ぶ」能動的学習を実現・支援しようというコンセプトです(図1)。

現在は、学部高学年や大学院生にまで支援の対象を拡大していますが、コンセプト作成当時(2011年)は「普遍教育における学び」つまり、西千葉キャンパスの1・2年生を主対象として教育・学習支援を展開していました。この当初のコ



図1

ンセプトの発展版が「アカデミック・リンク松戸」です。

学習支援コンセプトである「アカデミック・リンク松戸」が具体化してきたのは2017年以降だと思うんですが、従来の「アカデミック・リンク」の基本コンセプトに、松戸ではさらにプラスアルファをしました。そもそも、松戸は園芸学部、つまり、一学部の所属者で構成されたキャンパスなわけですね。そうすると、専門に対して興味を持っている人は自然と多くなるわけですが、これに加えて、各自の「専門以外」にも興味をもって、「広くかつ深く考える学生」を育てよう、という独自の学習支援コンセプトをまず新たに立てました。支援を設計していくうちに分かったのですが、園芸の学生さんは、研究を視野においた学びをしていることがとても多いのです。従来の「アカデミック・リンク」では、教育と学習が支援の主眼だったんですが、これに研究の支援もプラスしていくことを考えました。…なので「園芸学研究科に特化した学習サポートのコンセプト」が「アカデミックリンク・松戸」である、という言い方もできると思えます。

さらに、実は2011年以降、西千葉では「アカデミック・リンク」のコンセプトにもとづいて、「学習環境の整備」が急速に行われていました。千葉大学附属図書館の本館が4棟構成になって、(一部の棟は)1階から4階まで会話可能なアクティブ・ラーニング・スペースが整備されるなど、学習環境がすごく良くなっていったんです。ところが、そこ(西千葉)で学んだ学生さんが、学年が上がって松戸に来たとき、学習環境とかコンテンツが(西千葉と比較して松戸の方には)まだ整っていない、という課題がありました。なので、これをなんとか整備していくことにも力点をおきました。

さて、では実際に支援を行うときに「何をどのようにサポートしたか？」という話ですが、単純に「我々はこれがいいと思う」と思い込みで動く訳にはいきません。ですので、実はきちんと下準備をしています。まずは、学内のIR担当の先生にご協力いただき「松戸の学生さんがどんな学業や生活を

送っているのか？」その分析をしました。そのうえで、私たちアカデミック・リンク・センター（西千葉拠点）にいる人間は「松戸をちゃんと分かっていない」ということで、いくつか松戸キャンパスの研究室を訪問させていただきました。学生さんたちの普段の学習環境を見て、研究室の先生と学生さん、双方のご意見（支援ニーズ）を伺うということはかなり丁寧に、先生方にもご協力頂きながらやりました。

園芸学研究科の院生さんに対して、学生だけのグループインタビューもしています。園芸学研究科の全領域の学生さんを集めて、何回かインタビューを実施したんですけれども、その結果「研究室についてはもっと早くから知りたかった」というニーズや、（西千葉と松戸間での）キャンパス移動が多いという事情もあると思いますが、「研究室に入る前は“居場所”がない」「西千葉が大学の本拠地なので、そこでいっぱい支援セミナーが行われるんだけど、参加したいのにそれに参加できない」という忸怩たる思いとか、「留学に対するサポートが…足りてないというより、学生に見えてない。届いていない」とか、それから「資格試験対策もかなり重要なんだ」というような、実にいろいろな声が学生から上がりました。

…なので、これらを前提に、まずは園芸学研究科のカリキュラムに沿った教育と学習の支援をしつつ、同時にもうちょっとラボ（研究室）にも注目すべきだなと考えました。研究室で行われる教育・学習・研究。それにプラスアルファした活動もそれぞれの研究室であるはずなので、これに合わせた支援が必要であろうと分かりました。さらに、松戸では学生さんが自発的に行う学習や諸活動が、比較的多い感じもしましたので、そういうもの、つまり、大学の勉強と直接関係ないんだけど「自分のキャリア、自分の研究、自分のプロジェクト」に対して、「必要な何か」があるならば、それも支援しよう。少し（西千葉よりも）学習支援の間口を広くしていこう、ということを考えました。

なので、当時西千葉でやっていた学習支援より、松戸の学習支援は拡大している傾向があると思います。こうした「広い支援」を念頭に、空間設計ですとか、研究データ（に関連した）支援なども含めたサービス・デザインをしていきました。ここから先は、先ほど示した三角形の図の順番通り（①学習空間の設計：Place⇒②学習サポーターの配置：Supports⇒③学習コンテンツの整備：Contents）に、説明をさせていただこうと思います。

最初に、「空間」をどう設計したのかという話をさせていただきます。…ここでちょっと、ご紹介したいものがあります。物理空間としての「アカデミック・リンク松戸」がですね、先日「グッドデザイン賞」を受賞しました（<https://www.g-mark.org/award/describe/52653>）。松戸アカデミック・リンクの外側にはこういう緑のフィールドがありまして、庭園からずっと図書館まで、外と自然に繋がっているという、



写真1

非常に素敵な設計になっています。このサイトには「建物の中から外がどう見えるか」という話は載ってないので、ここから先はこちらのスライド（写真1）を見ていただきたいんですが、「松戸アカデミック・リンク」の特徴は、この（建物の）周辺にある自然環境や庭園自体も、学習における教材やコンテンツとしてとらえている点です。なので、ここから先…私が話すときには「学習コンテンツ」がちょっと図書館寄りなわけですけれども…本来は、園芸学部の先生が提供する教材や、キャンパスの周辺環境も含めて広く「学習コンテンツ」と捉えています。その結果、いろいろ頑張って設計してくださったものが、先日グッドデザイン賞を頂いたということになります。ご興味のある方は（グッドデザイン賞の）サイトをぜひご覧になっていただければと思います。

スライドの方に戻ります。最初に空間（建物内部）の説明をさせていただきます。まず2階は、アクティブ・ラーニング（グループでの協同学習）に特化した学習空間になっています。複数人が集って会話可能な空間で、可動式の机と椅子が置かれています。それから壁がですね、写真で白く見えるところは、ほぼほぼ全部、実はホワイトボードです。上から下まで全部「書ける」ようになっています。2階の白い壁は（一部の例外を除いて）ほぼホワイトボードとご想像いただければと思います。現在この壁は展示（注：今回の記念展示）で使っているので、絵が掛かっていますが、その後ろの白い部分は、好きなだけ学生さんが絵や図を描けるボードです。

それから、今はパソコンを使う学生さんが多いので、コンセントをありったけつけました。「施設環境部の方が悲鳴を上げない限りは…」っていうのを冗談で言っていたんですけども、空間のいたるところに、柱とか足元を見ると、やたらとコンセントがある状態になっています。これには理由がありまして…。学生さんの学習動線は、実はコンセントの位置によって、かなり制限をされてしまうんです。なので、コンセントがある場所に学生が寄っていったら、そのせいでホワイトボードが使えない、みたいな、本末転倒なことが起きないように考えました。いたるところに「あれ！？ここにもコ

ンセント!?)となるような設計にしてもらいました。

また(空間の)真ん中のところに、総ガラス張りのグループ学習室があります。2室あって…写真だと見づらいんですが…男性が壁に字を書いているように見えると思うんですが、これ、壁ではなく木材の上に特殊なコーティング剤を塗っていて、この壁が全面ホワイトボードになっています(写真2)。ここも好きなだけ「壁に絵も図も書ける」状態になっています。(グループ学習室2室を)ガラス張りにしたことに実は理由があります。附属図書館の西千葉本館の学習空間には、重要な設計コンセプトとして「見る・見られる」ことを重視する、というのがあります。学生が「勉強をしている姿」を、他の学生が「見る」ことによって、互いに刺激を受けられるようにする、という前提があるんです。なので、実はこの2階の空間は「なるべく遮らず」を原則に設計しています。…学生には「ステスケ」と言われましたけど、つまり、なるべく「勉強している姿が見える」ようになっている。お互いの姿を見ながら「あんなやり方、学び方もあるんだな」っていうのを、互いに共有しながら勉強してもらうというような、ちょっと他より「ステスケ」具合の大きな学習空間になっています。



写真2

…あともうひとつ、先ほどからいろいろなところで「フィールドとの近接」というキーワードが出てきていると思うんですが、2階には、大きな「蛇腹のガラス扉」みたいなものがあります。これ、実は開きます。フランス庭園に向けて、バツとこう開きます(写真3)。前にある木が、緑の時期にはパワーッと眼前に広がってきれいです。秋になるとサッと葉っぱが落ちて、冬以降はここからずっと「1本の線」のように、フランス庭園の中央軸、真正面の景色が見えるようになっています。さらに設計当初から言われていたのですけれども、学生さんが外で学んで、その後「図書館に入って来やすいようにしよう」「庭園と圃場とのつながりを大事にしよう」とか、いたるところで「外とつながる」仕掛けが詰まっています。…ちょっといろいろな事情で、コロナ等もあって

ですね、このガラス扉が開いているところを見たことある方はまだ少ないと思うんですけども…イベントのときなどには、この扉をバツと開いて、市民の方も出入りできるような設計になっています。ほかにも、在校生の皆さんはぜひ床を見ていただきたいんですけども、学生さんが「植物を持ち込んだりするかも」とか「長靴で泥をつけたまま圃場から来ても遠慮しなくていいように」とか、(いろいろ考えて)非常に掃除のしやすい床になっています。ほかにも「十分な光量を確保してあげたい」という先生方からのオーダーがあったりとか、先生方の学生の皆さんへの細かな思いやりがすごく詰まった空間になっています。…今ちょうど、葉っぱが落ちだした頃なので、もし図書館へいらっしゃる方は、ぜひこの、2階の空間とそこから庭園の方をざっと見ていただけたらと思います。



写真3

つぎに、3階の方なんですけれども、3階は「個人学習用」の空間になっています。全部の個人学習席が実は窓側を向いていて、コロナで間引いている現在でも72席ありますが、全ての個人学習席が外向き(窓に面した座席)になっています(写真4)。3階の他の部分は、一般的な、昔ながらの図書館ですが、この個人学習席は特徴的だと思います。「ラボにいと個人学習がうるさくて出来ない」と言っていた学生さんもいましたので、松戸でも「個人学習」のニーズ自体は非常に大きかったです。さらに「静かに勉強できる空間」に関しては、これは西千葉キャンパスでの経験上、十分なパーソナル・スペースがあると、学生さんは非常に喜ぶということが分かっていました。なので、松戸の場合、実は机の奥行きが西千葉よりもかなり深めになっています。図鑑やレジュメを置いて、さらにパソコンを見る、地図も広げて見るなど、ちょっと「大きめの資料」を使うニーズが多いようでしたので、奥行きのある机は適していると思います。

また(個人学習席に)個別コンセント・LED照明・ブラインド、というセットは、西千葉の図書館にも装備しているものなんですけども、自分で光量を調節可能で、自分一人で電



写真4

源を占有できるという点は、今回の松戸の空間設計でも佐藤総合計画さんが見事に踏襲してくださって、実現できたということになります。

つぎに学習コンテンツの整備に関してです。これは先ほども申し上げたとおり、本来は、外から持ってきた葉っぱ、圃場から持ち込んできたもの、それらも含めてすべて「コンテンツ」として考えています。…が、私は立場的に図書館と仕事をすることが多いので（ここから先の発表は）図書館のコンテンツに内容がちょっと偏っております、申し訳ありません。

「コンテンツと学習の近接」の本質は「学習の近くにコンテンツが寄っていく」こと、学生がわざわざ本棚に行かなくても「本棚の方から学生さんの居場所に近づく」ことを意味しています。なので、2階のアクティブ・ラーニング・スペース、机と椅子が自由に動かせる協同学習空間にも、壁沿いに本棚がたくさん置いてあります。この壁沿いの本棚は『研究資料ナビゲーター』と名付けましたが、いわゆる「十進分類法」という、図書館でよくある「分類法」では配置していません。園芸学研究科の「領域別」に配置されています。各領域の先生方に、すべての本を選んでいただき、さらに一冊一冊に「推薦コメント」もつけて頂きました。これから研究を始める人に向けた研究入門書、論文、図鑑などが並んでいます。「各領域100冊が目標！」という大変無茶なお願いをしたんですが、なんと先生方がこれに応じてくださった結果、現在（2階の壁沿いの本棚に）454冊配置されています。さらに現在、これらの本は「電子ブック」でも同時購入して、手に入る限りは…すみません日本の図書って電子化されてないものが多いので実は難しいんですが…、電子化されているものに関しては、学生さんが図書の検索に使うOPACというシステムの、「ブックリスト」というリンクを開くと、ここから直に見られるように図書館員が頑張って整備してくれました。研究室とか、ご自宅からも読めるので学生さんはぜひご利用ください。この『研究資料ナビゲーター』にあ

る図書は、現在、松戸分館の年間総貸出冊数の10～15パーセントを占めています。先生方にご尽力頂いた甲斐あって、学生さんにもその後、非常によく利用されています。

つぎに学習サポーターの話をいたします。西千葉では（院生による）学習サポートに力を入れています。領域ごとに学生さんの支援ニーズが異なっている可能性が高かったため、「6領域別の学習相談」を先ほどの2階の学習スペース内で行っています。このサポーターの院生さんは、園芸学研究科の教務教員会を通じて、各領域の先生方に推薦をいただいた大学院生のみなさんです。つまり、各領域から1～2名ずつ「先輩」がここに座っていて、毎日学習相談にのってくれています…新型コロナウイルス対策で、今は「オンライン形式」に移行しておりますが、月～金曜日のどこかに、自分の所属領域の先輩が必ず座っていて、学習に関する悩みごとの相談にのってくれるという園芸学部生専用の「相談デスク」です。まだあまり浸透していないようなんですけれども…。学生のみなさんはぜひご利用ください。「サポーターの自己紹介も載せたいいいんじゃない？」など、園芸学部の先生方や学生さんから出された提案は、随時積極的に取り入れて、ウェブサイトに掲載もしています（<https://alc.chiba-u.jp/eyr/2020/06/22/01alsals>）。

「アカデミック・リンク松戸」では（学習サポート以外に）研究サポートにも力を入れています。たとえば、西千葉では研究セミナーが日々、各種開催されているんですが、「松戸からだ移動が難しく参加できない」という声が非常に多くあったもので、各種研究セミナーをウェビナー化したり、オンラインで提供することを試んでいます…ただやはり「手を動かす」実習系のセミナー、たとえば「論文を実際に探してみる」とか「機器を操作してみる」みたいなセミナーは、対面で、かつ、その場で直接やりとりをしないと提供が難しい。なので、そういう実習系のセミナーに関しては、西千葉から松戸へ講師が出張したり、松戸の院生さんにもちょっとご協力いただいたりしながら『15min.Session!』という、少人数制の実習型セミナーの「松戸版」を開催もしくは予定しています（写真5）。

…実は、新型コロナが流行する以前から、我々は「遠隔キャンパスにいる松戸の学生さんにもセミナーを届けたい」と、ウェビナー化などの準備を進めていました。松戸の学生さんが、西千葉のセミナーに夕方息を切らせて駆け込んでくれる、みたいなことが実際にありましたので。「この人たちがをなんとか支援しよう」と思って、事前にいろいろと準備をしていたものが、その後のCOVID19流行下において、全学のリモート支援にいち早くつながられました。亥鼻ですとか、他の遠隔キャンパスにも「届くサポート」の実現につながったので、これは（学習支援を主務とする我々にとっても）大変ありがたかったなと思っています。

最後に「まとめ」と「これから」ということで…座談会に



写真5



写真6

繋がる話をしようかなと思います。これまで我々は、「学部や教育カリキュラムの特性に合わせた学習支援」と「学生のニーズに合わせたカスタマイズ型学習支援」を心がけてきました。同時に「電子情報源とリモート支援をフル活用する」ということも、意識的にやってきました。なぜ「電子やりリモート」に注力したかという点、まずは、松戸が遠隔キャンパスであったので、遠方にいる人に支援を届けようとする、電子化が必須だったという事情があります。さらに、松戸はラボを中心に学習が動いていると思うのですが、ラボ（研究）の世界は、すでにとっくにいろいろ「電子化」されています。その上で「大学図書館にできる学習・研究支援は何か？」を考えると、電子情報源や資源をフル活用することは、もはや自然というか必須でした。

さらに付け加えると、松戸が有する「コンテンツの電子化との相性の良さ」も遠因にあったと思っています。『江戸明治期園芸書コレクション』や『萩庭植物標本データベース』（<https://alc.chiba-u.jp/c-arc/>）、『花色素ライブラリー』（<https://www.cu-hort.com/plant/index.html>）のように、園芸や植物に関するものは、電子化することで幅広く「市民」や「他大学の人間」にも役立つ情報が実はたくさんあります（写真6・7）。先生方の研究成果も電子化すると広く利用されやすくなりますが「物理環境」と「電子環境」の双方で、バランスの良い学習・研究支援を展開していくことが、今後は不可欠かなと思っています。園芸学は「手を動かす」とか「人に会いに行く」みたいなことも、すごく必要で重要な分野だと思っています。両方やらないとダメだな、というのは支援者の立場からも感じています。

園芸学教育や研究は…さきほど、登壇者の先生方と幕間に話していたのですけれど、いろんなものが「組み合わせさせて創造性を発揮する」という可能性がとても高いように思います。距離とか時間を超えてそれらを結集するとき、電子化はすごく有用なんじゃないか。電子化によってその結集や創造がさらに加速する可能性のようなものはちょっと感じました。

花色素ライブラリー

トップページ 色から花を探す 品種名から花を探す 色素一覧 群集一覧 遺伝子一覧

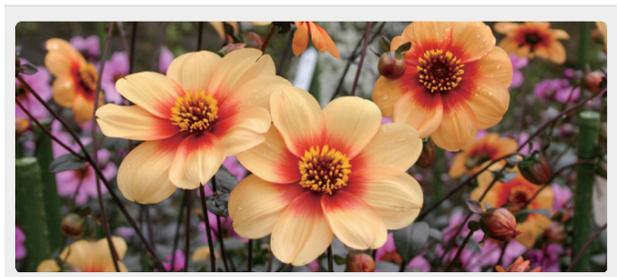


写真7

最後に、これは我々のこれからの課題なんですけれども、いろいろ（空間や支援サービス）作ってはきたものの、完成後、まだ先生や学生さんからのフィードバックを十分に受けていないんですね。なのでラボとか研究とか、その後（この支援を受けて卒業して）キャリアを積んだ先輩方の意見とかも、今後聞かないといけません。あとはCOVID19が起きた後の教育がどう変わるかと、学生さんがどう変わるかと、この辺も取り込んでいかなければまずいなと思っています。…特に学生さん、デジタル順応がかなり早くてですね。「もうノートを電子で取ることに苦労はありません」とか、だんだん学習方法が変わってきてしまっている、これに合わせた支援がさらに必要かなと思っています。一方で、リアルな場所での学習サポートも、始めたばかりのころにCOVID19になってしまったので、これらの進化については、まだこれから評価が必要です。広報も同時並行で続けたいとまずいと思っています。

…最後に一瞬、さきほどのウェブサイトをお見せします。『千葉大学学術リソースコレクション (c-arc)』は、図書館のホームページからも飛べます。園芸学の古書を他大学の蔵書と見比べたりできます。『花色素ライブラリー』は園芸学研究科の先生方によるものです。花の写真から色素や品種を探し出すような、こういう電子的な研究成果物がたくさん作

られていますので、ご興味がおありの方は、ぜひご覧になっていただければと思います。すみません、ちょっと時間超過いたしました、これで終わります。

小林●はい、どうもありがとうございました。もうひとつコメントいただきたいと思います。田草川みずき先生からお願いしたいのですが、先生は文学部のご所属で、園芸学からはちょっと遠い分野ですが、図書館の様々な文書ということに関してはご専門でいらっしゃると思いますし、実はお父様は園芸学部出身の方です。田草川先生は近世文学、特に演劇にご専門です。ではよろしくお願いたします。



田草川●ただいまご紹介にあずかりました田草川と申します。私は父が千葉大の園芸学部出身ということで、幼い頃の、大学というものの最初のイメージが千葉大の園芸学部でございました。

父の仕事や趣味が、かなり園芸と関わっておりましたので、大学というのは、生涯にわたる仕事や趣味に繋がる学びをもたらしてくれるもの、という、とても良いイメージがございました。

ご縁あって、文学部の方に就職することになりまして、そしてこの場にお声掛けいただいたことを大変光栄に思っております。本日は私も園芸好きということもありまして、張り切って準備してきました。今回の展示と松戸分館の所蔵資料について、少しコメントをさせていただきたいと思います。こちら、今回の展示で作られていますリーフレットですね、一見していただくとわかるんですけども、彩色が素晴らしい資料があります(写真8)。先ほども小林先生に案内していただきましたが、大変貴重な資料が揃っております。ただ展示となりますと、やはりこうした彩色された資料は退色の心配がありますので、あまり長く展示することはできないですね。それを見越して、インターネット上でも、先ほど國本先生からもお話がありました通り、すでにこの手の資料が公開されております。

その公開資料の閲覧方法が、ちょうど展示会でもスライド



写真8

上映されておりました。千葉大学附属図書館のトップページから、「千葉大学学術リソースコレクション」というアイコンをクリックします。古医書コレクションも素晴らしい資料なんですが、今回は江戸明治期園芸書コレクション、という方に入ります。

で、下の方に行っていただくと、先ほど國本先生がご紹介してくださった通り、Viewerが選べます。クリックすると非常に高精細な画像を見ることができます。この資料に描かれている華鬘草(けまんそう)は、鯛釣草(たいつりそう)という名前で今でも売っていて、私も好きな植物ですけども、こういう沢山の画像を、皆さんも見ただけです。

こういうカラーのもの、美しいものも良いんですけど、私は人文科学研究の立場から少し気になった資料があります。倉重先生のご講演の中にも登場しました、『錦繡枕』という資料です。こちらに所蔵されているのは複製本ですけども、この「枕」と付く書名で興味を持ちました。と申しますのも、「枕本」という言葉が書誌学にあります。別名懐中本とも言われて、『精選版日本国語大辞典』では、「箱枕の引き出しに入れられる大きさの本。半紙を二つ切りにして、横長の形にとじた本」。例文として浮世草子から、「太平記の枕本をそろそろと読んで」と出ております。スライドの写真は、『図説江戸の演劇書—歌舞伎篇』(八木書店、2003)という本が

ら引いてきましたが、私の専門の演劇研究の中でも、この横本とか懐中本は、非常になじみ深いものなんです。例えば河東節の段物集、段物集というのは、歌のサビ部分ばかりを集めたようなもので、お稽古に使う本です。

それと「役者評判記」、今風に言いますと、「推し」の役者の活躍についての論評を毎年見て、なるほど今回は位付が上がったのね、大上上吉ね、というような感じで楽しむ、そういうファンブックです。例えば持ち歩いてみんなで読みあったりですとか、あるいは今で言うベッドとかソファーに寝転んで読んだりとか、そういう本なんです。本日、小林先生はお着物ですけれども、ちょうど懐中本は、着物の懐に入れたり、袖に入れたりして、まさに「フィールド」に持って出る、というものです。今日の倉重先生のご講演で、伊藤伊兵衛の庭で大きな「霧島」を見ながら、子どもの株を物色するという話がありましたけれども、『錦繡枕』はそういう時に、もしかしら持って歩いていたんじゃないかな、という本です。

それとこちらのスライドは、明治になってから刊行されたものなんですけども、謡本でして、『謡曲たびまくら』（1894年刊、檜文庫蔵）という名前がついています。これは、この木箱も特注したような特別本なので、本当に枕にはしたりはしないと思いますけれども、それでも風流な命名で、旅に持ち歩いてそれを枕に眠って、時に謡を謡う、そういう風に使って下さい、というような、そんな意味が込められた本だと思うんですね。ですので、この『錦繡枕』も、これらの横本と同じような出版意図が込められていたのではないかと、享受者もそのように使っていたのではないかと考えると、大変興味深い資料だなと感じました。

展示されているもの以外にも、実は今回、いくつか興味を持った資料を閲覧させていただきました。私は、先ほどからきれいな本、とか言ってますけど、実は「ボロい本」も大好きなんです。それで、中でも私が初めて松戸分館に閲覧に伺った時から魅せられてしまったのがこの本で、『後の花（のちのはな）』三巻三冊です。私のPowerPoint資料のスライドに使っている虫の絵も、実はこの『後の花』から取らせていただいたんですけれども、こちらの展示は太っ腹で、写真を撮っても良いということだったので、展示の写真も撮らせていただきましたし、閲覧した資料の写真も撮らせていただいたのですが、こんな風に加工していいとまではご許可いただいていたので、今ヒヤヒヤしながら出しております(写真9)。

それで、これは菊の栽培についての本なんです。虫は、菊につく虫の紹介ですね。育て方、土づくり、種類ですとか、種類に関してはそれぞれ絵がついています。あと花壇の管理、花の飾り方、差し芽の仕方、菊づくりについてのあらゆる情報がまとめられているという、大変楽しい、ガーデニング好きにはたまらない感じの本ですね。せっかくなので少し内容のご紹介をさせていただきますけれども、こちらは「花



千葉大学附属図書館松戸分館所蔵
『後の花』三巻三冊（正徳3年・1713刊）

写真9

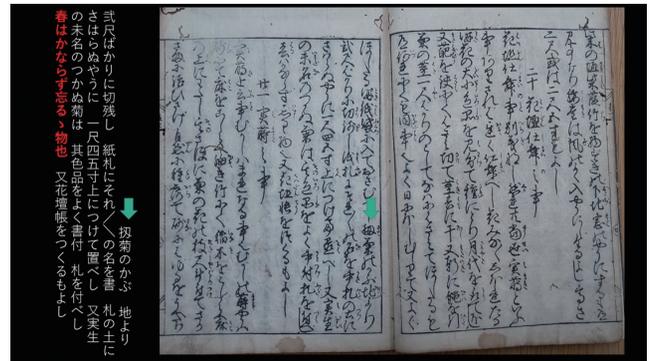


写真10

壇仕舞の事」ということで、ちょうどこの緑の矢印の所から、少し翻刻活字化してみました(写真10)。

「さて菊のかぶ 地より二尺ばかりに切り残し 紙札にそれぞれの名を書き 札の土にさはらぬやうに 一尺四五寸上につけて置くべし また実生のいまだ名のつかぬ菊はその色品をよく書き付け 札を付べし 春はかならず忘るゝ物なり また花壇帳をつくるもよし」とありまして、この「春はかならず忘るゝ物なり」が、ガーデニングあるあるで、非常に共感を覚えました。この本が面白くて閲覧に伺っては、一生懸命読んだりしたんです。でも、やはり専門ではないものですから、分かり兼ねるところもかなりあります。例えば、とても素敵な絵が入ってまして(写真11・12)、真ん中のは「一輪生け入れ、桐杉檜板よし」というように書いてあるんですけども、これはいったい何に使ったのか、花を活けて飾るものなのか、それとも持ち運ぶものなのか。下には「苗通箱」がありまして、これはやはり持ち運んだもののようなんです。さらに左側は、「菊花久しく嗜み置くこと」と書いてあって、長く保存するための道具のようです。サイズも詳しく書いてありますし、気になったのは、「また田舎へ行くにもこの箱に入れて行きてよし」と書かれていて、どうやらこの箱で田舎にまで運んでいたらいいことがわかるんですけれども、それも倉重先生のツツジのお話で、運搬の

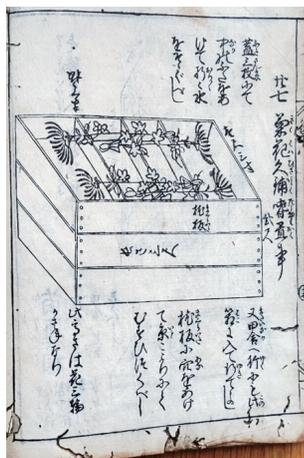


写真11

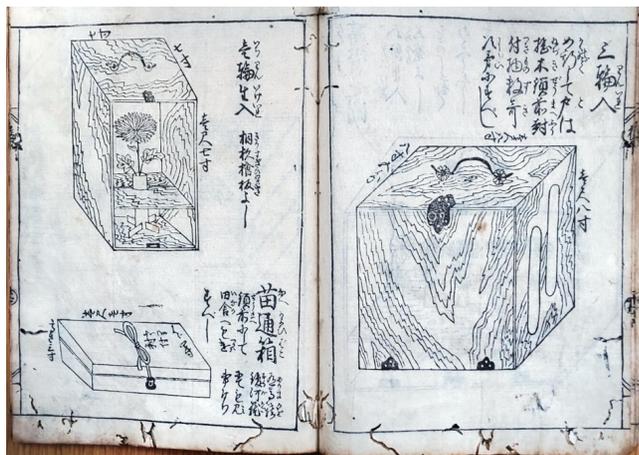


写真12

あとは、日比谷加賀本は中巻補写とか、上巻欠、中巻欠ということで、写真が見られる完全なものがないんです。

そこで、もうちょっと完全なものを見たいなということで、国会図書館本だったら見られるんじゃないかと思って、国立国会図書館デジタルコレクションで検索してみました。そうしますと、三巻をいっても、三巻を合綴して一冊にまとめている本だったんです。しかも表紙を見ていただくとわかるんですけども、こちらの松戸分館所蔵の本は、書誌学では大切な「題簽」が三巻とも揃っている（写真13）。多少欠損はあるんですが、ちゃんと題簽題（外題）が読める形になっております。国会図書館の本は、同じ題簽が貼ってあったんだな、ということは下の方の、わずかに残った部分の色でわかりますが、題簽がほぼ全て欠落しておりまして、松戸分館の本の方がずっと、素性というか、状態は良い本ということになります。



写真13

お話があったんで、大変興味深く伺いました。こういう実際の運搬、植物の運び方について書かれた文献がどのくらいあるのかというのも、ぜひ伺いたいと考えております。

そんな楽しい『後の花』という資料について、もっとよく知りたいと考えまして、そういう場合は、例えば文学研究の世界では、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」、これは「新日本古典籍総合データベース」という新しいデータベースと、旧とがあるんですが、私は旧の方のデータベースに親しんでいて、新でうまく動かないところもあるので、今ちょっと移行中なのかな、という気がします。

旧の方の日本古典籍総合目録データベースで、この『後の花』について検索してみました。そうしますと写本もあるんですけども、正徳三年（1713）版の版本が、国会・国会白井・京大とあって、この3つは完全版、とここからは読み取ることができるのですが、東北大狩野文庫本だと欠落があります。この東北大本は、このデータベースから写真が閲覧できるんですけども、第九丁欠とあって、完全本ではないわけです。

例えば、私が指導している学生が卒業論文を書くとなった時に、古典籍については、国立国会図書館デジタルコレクションですとか、先ほどの国文学研究資料館のデータベースを見るんですね。特に国文学研究資料館の方は、どういう本が全国にあるかということを一覧化してくれていますから、それをもとに研究を進めるわけです。

ところが残念ながら、今のところは、千葉大学の古医書コレクションですとか、今回の松戸分館のコレクションが、これらのデータベースに入っていない。けれども希望があるのは、今ちょうど、国文学研究資料館との共同作業を進めてらっしゃることが、展示のスライド上映に出ておりました。ですのもう少ししたら、データベースにこういった資料が出るのではないかなと、たいへん期待しております。文学部の卒業論文で、わたくしが指導した学生の中に、江戸の料理本とか、江戸の名物をテーマとした学生がいます。例えば国文学研究資料館では、江戸の料理本をもとにして実際に当時の料理を作ってみる、ということもやっています、それは

大変面白い企画で、そういうものに触発されている学生も多いです。その意味では、『後の花』の菊の栽培法を、実際にやってみたらどうなのかな、先ほどの保存法だとか、あるいは飾り方だとか、復元できないのかな、というの、一園芸ファンとして興味深く感じております。ぜひそういうことも考えていただきたいのと、また学生に興味を持ってもらうために、この貴重な書籍をどんどん公開していただきたい、と希望しております。ちなみに、『後の花』って翻刻されているのかな、全文読んでみたい、と思って、国立情報学研究所のCiNiiの論文検索で調べたんですけども、「後の花」で検索しても、「受粉後の花～」とか、そういう論文しか出てこなかったんで、このあたりの研究がどの程度進んでいるのか、ここはぜひ先生方にお伺いしたいところだと思っています。

最後になりますが、やはり本が好きなので、展示会でも美しい本が多くて、本当に感激しました。例えばこのスライドの右側は『草木錦葉集』、左側は『本草図譜』ですね(写真14)。この大根の絵も素晴らしくて、あのこれは個人的なちょっとしたお願いなんですけれども、ぜひ園芸学部オリジナルグッズ、トートバッグ、クリアファイル、一筆箋などを、これらの素晴らしいデザインを使って、作っていただけないかなと、いうことも希望しております。また他にもいろいろ、大野先生にも演劇関係でお伺いしたいこともあるんですけども、この後の座談会でお話しさせていただこうと思います。ご静聴ありがとうございました。



写真14

小林●はい、色々なお話を提供していただいて、どうもありがとうございます。今のお話で、倉重先生、何かお答えできることありますか。菊の栽培のこととか。

倉重●当時の園芸というのは、見せたり、競争したり、番付を作ったりということですので、いいものができたときは特別なものに入れて長期間保つようにしたり、そのために持ち

運んでいうことがあったと思いますし、その苗を欲しいと言われたときに、冬至芽と言って、冬に出る芽を分けるのですが、それが乾かないように入れる箱とか、そういう用途があったと思います。

「錦繡枕」は、中に書いてあるのですが、この本を枕にすると、白黒の本だけどまるで錦の布団をかけて寝るような、素晴らしいツツジの夢が見られる、というようなことが書いてありました。そういう意味で枕本なのかもしれません。

田草川●文字通り、枕にしてしまうって感じなんですね。

倉重●そんな意味だそうですね。

小林●どうもありがとうございます。すいません、私自己紹介するのを忘れてました。私、千葉大学附属図書館松戸分館長をしている小林と申します。専門は再生生態学と申しますが、植物の生態研究をしています。よろしくお願ひいたします。時間があと30分ちょっとになってきたんですけども、視聴されている方からも質問が入ってますので、その質問の受け答えも含めて、フリーに座談を進めていきたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

まずちょっと細かい質問から、倉重先生にご質問ですけど、「見染(みそめ)」という形質はあまり聞いたことがないけれども、ツツジ特有のものなのか、っていうご質問と、それから園芸品種の育種は技術の進歩はちゃんとできているのか、あるいは高齢化などで下火になっているんですか、という質問です。よろしくお願ひします。



倉重●見染の形質は「錦繡枕」にも出てくる古い形質ですが、ほぼ現在まで忘れられていたものだと思います。有名なところだとサツキの長寿宝という品種が見染性なのですが、花が長く咲くくらいの認識で、これまであまり注目されていませんでした。ツツジ以外の見染性があるかは分かりませんが、見染性は、花卉が変異を起こして萼化したもので、花びらが小さくなる傾向があるのですが、同時に花が長期間残るとい

う特性があります。論文も見染性で調べていただくと、いくつか出てくると思います。見染性の遺伝子の変異は、サツキの系統とヤマツツジの系統に1つずつ見つかっています。

品種改良、育種についてなのですが、現在はさまざまな技術を使って、過去よりも進んでいるとは思いますが、対象となる植物が限定されていると思います。例えばツツジの場合、育種が進んでいるかということ、そんなに売れない、人気がそうないということもあって、かつてよりも品種改良のスピードは落ちているのではないかと思います。一方では人気のある草花ですと、千葉大の三位先生の青いコチョウランのように、これまでできなかったような花ができてきているということもあります。日本の強みというのは突然変異の集積、突然変異のコレクションを持っているということがありますので、その価値を再度認識して、それを育種に応用することで、さらに素晴らしいものが出てくるのではないかと思います。以上です。

小林●はいどうもありがとうございました。もう一つちょっと細かめの質問です。明治になって大久保のツツジが各地に分散していくのは、大久保が生産地から住宅地へと変わる都市化の影響みたいなのがあったんでしょうか。あるいは別な理由があったんでしょうかっていうご質問です。

倉重●江戸時代の終わり頃から明治の初期にかけて、ツツジの生産に関してはほとんど文献が残っておりません。大久保が衰退したから外部にツツジが出たのか、外部にツツジを販売していたけれど、それとは別の理由で衰退したのかというのは、今のところよくわからないというのが実情です。ぜひその時代の文献がありましたら逆にご教示いただけますと、明治から近代にかけてのツツジ栽培や生産がどう変化していったかということがわかりますので、ご協力いただければと思います。実際ちょっとわからないというのが正直なところです。

小林●次はちょっと大きなテーマです。2つあるんですけど、関連付けて質問させていただきます。1つは現代の危機の一つ、生物多様性保全に関連して、日本の園芸文化の果たし得る貢献などがあればご教授お願いします、というもの。もう一つ、「青天を衝け」を見ており維新直後の発展に関心があるという方から、日本の園芸の発展に政府や研究者が果たした役割について、また日本の園芸文化の再興について、何かご意見があったらいただきたいということです。よろしくお願いします。

倉重●野菜の地方品種が例えばあるとすると、それも保全するだけではあまり意味がなくて、それに付随する調理法です

とか食べる文化がセットになって、一つの保全の形だと思えます。園芸品種についても、例えばクルメツツジは本来、傘仕立てと言って、スタンダード仕立てにして鉢植えにして観賞するものだったのですね。品種改良はそれぞれの地域性ですとか、植物による観賞の作法っていうのがありましたので、それに伴って品種がだんだんと特異的に分化していったと思います。花き類の園芸品種も、野菜と同じで植物を保存するだけではなく、それに付随する文化も保全していく必要があると思っています。それがどの程度重要かというのは、保全というのは、そもそも取っておいて何かの時にこう役に立つか、役に立たないかわからないけれど、取っておくということもありますので、役に立つ、立たないは別にしてセットで保全すべきだと思います。

もう一つの質問は先ほどと同じ答えですが、八重咲きとかの形質は、これは交配ではなくて突然変異で出るものですが、そういう形質、日本人が見つめてきた形質を再評価して、今後の育種に生かすことで日本発の園芸の新しい世界見えてくるし、それが消費や生産の拡大にもつながっていく、と言えるのではないかと思います。斑入りを観賞する文化というのも、もともとは西洋にはあまりなかったようですが、日本人が価値を見いだしてきたものが、今、世界で評価されているわけです。もう少し日本人が客観的に自分達が持っているものを評価して世界に発信できればと思いますし、実際、日本がオリジナルを持っていて、生産や品種改良の中心だったのが、他の国に移ってしまっていることが多いとも感じています。今後はそういうことなるべくないように、きちっと日本の園芸を評価して、それを使っていくというような体制が必要になるのではないかなと思っています。以上です。

小林●はいどうもありがとうございます。園芸文化についてはまた最後に戻ってきたいと思いますが、ひとまずありがとうございます。次は大野先生に対して2つほど質問がきています。質問というかご意見でしょうか。アクアマリン福島で、地震の津波で電源を失った時に、大半の魚類が死に絶えたけど、古代の生物は生き残りましたとお話しされていました。自然に対抗でなくて自然とのつながりにフォーカスということが大変良いことだと思います。あのデザインはそういうことを意識されたのでしょうか。

大野●震災復興の時、アクアマリンふくしま館長の安部さんから、縄文の里をやろうという話がありました。それは、縄文時代の風景を再現する施設というよりは、縄文時代において人と自然との間で形成されていたであろう双方の緊密な関係性を展示することに意義があるのではと私は理解しております。自然に対抗するのではなく、自然とうまく付き合う方法はその時代ごとにそれぞれ形を違えどあるかと思

ます。私が今日お話ししたような江戸の庭園や伝統的な農業システムにはそのヒントがあると考えています。しかしこれらを未来に向けて継承していこうとする上では、何かしら現代の社会システムにあうように読み替えたり、再構成していかなければならないと思います。そこに設計やデザインの可能性があるととも考えています。

小林●もうひとつこれはなかなか難しい質問ですけど、大野先生のスライドの中で広井先生の話がありました。広井先生は「ポスト資本主義」という著作の中で、労働生産性から環境効率性への誘導が時代の要請である、という趣旨の記述をされていました。資源の有限性というようなことがランドスケープの現場で意識される機会もありますでしょうか、というご質問です。資源の有限性というか、環境ということをランドスケープ作りの中で意識されてますか、という質問だと思うんですが。

大野●環境効率性という観点では、庭づくりは現代まで労働生産性があまり追求されてこなかったため、いまだに昔と変わらず環境効率性が重視されているのではと感じます。資源の有限性という意味でも庭はとても学ぶことが多いですね。よっぽどお金持ちの庭でもなければ、限りある資源をうまく活かして、職人の技や創意工夫により素晴らしい空間ができています。つまり庭を造っていく中で、その環境の中から庭の要素となりうる資源を発見し、その魅力を最大化させるといったことが作庭の中で考えられていたのではと思っています。こうした話は庭だけに限ったことではありません。私がランドスケープのプロジェクトに関わる中でも、機能充足型の空間ではなく、あえてほとんど何も無い空間をつくり、そこに人を呼び込んでそこに来る人々によって場をつくっていくようにしています。このような動きは全国各地でいろいろな事例が増えてきているように思います。



小林●はいどうもありがとうございます。

それではもう少し時間がありますので、お話を聞かせてい

ただきたいと思いますけども、今回展示会と、講演会をさせていただいて、私、分館長になる前は一人の研究者でございまして、少なくとも園芸学部図書館について関心があったわけではないんです。だけど図書館は好きでした。なんで好きだったかという、やっぱり、普段の生活と違うものに出会うことができる。私、大学のとき探検部にいたんですけど、図書館探検が楽しかったのだと思います。「こんな本があるのか」という発見を得ることができるというのが、図書館の楽しさだったと思います。今は一方でデジタル化が非常に進んでいます。学生は我々とはもう全然違う感覚でスマホからすべて情報を入れたり出したり、私がフィールドでしゃべることもスマホに記録していて、「君、ノート持ってきてないの?」って、いうそういう感じなわけですね。私がいらないことがあると、うちの娘は検索でばばっと見つけてさーっと答えてくれるんですね。そういう意味ではデジタル化、検索ができるようになったということは素晴らしいことだし、少なくとも研究の発展のためには絶対いいことだ、と思うんですけど、その一方で私が子供のころ感じてた探検する場所としての図書館、あまりたぶん目的があるわけじゃないんだけど、そこで遊ぶことによって自分の発見が新たにある、それも大事な気がしています。

今度の展示会も最初に何かアイデアがあったわけじゃないんですけど、資料が建物改修の後にどんどん帰ってきまして、それを見せていただいているうちに、こんなにいろんなものがあつたのかと、まったく外に出てない絵までいっぱい出てきまして、これはちょっとみんなに見ていただかないとちゃんと認識されないし、場合によっては散逸したりする恐れもあるから、見ていただく機会が必要だなと思ってやりました。

また、普段、図書は、十進法で分類されています。外部空間としてのランドスケープを整えられたわけですけど、所蔵する図書のランドスケープをどういうふうデザインしていくかということも非常に楽しい面白いことで、研究ナビゲーターとか1つの試みですよ、組み替えることによって新しい姿が見える。展示会もそういうことがあると思います。こういうことは時々やっていた方がいいのかなと感じた次第です。

それからもう1つは、この学部全体の問題なんですけども、図書館には古くから書物が所蔵されています。圃場とか庭園にはいろんな植物があります。しかし、その管理がきちんとできているかという、デジタル化は進みますけど、マンパワーがいるモノの管理ということがなかなかできなくなってきています。それをちゃんとやらないとデジタルデータばかり残っちゃって、モノがないことが起きる。倉重先生がおっしゃったように、植物と料理法があつて野菜園芸の文化がある、そういうのが切れた状態になってしまうというこ

とがあると思うんですね。そこをしっかりと活かしながら残していくとともに、新しいものを作っていくといかないといけない。

こうしたことを踏まえて、図書館と園芸学部は今後こういうことを考えた方がいいというアドバイスがいただければありがたいなと思います。まず一番そういうのには詳しく倉重先生から、何かいただけるとありがたいんですが。

倉重●園芸学部は実際の植物、実際の資料とデジタルが揃っているという、日本でも稀有な場所だと思いますので、ぜひそれらをうまく連携させ、いろいろな分野の方が参加するワークショップなどの試みをされると大きな成果が上がるのではないのでしょうか。

私が古い文献を調査する場合ですと、目次がない本を1枚1枚全部めくって、しかもよく読めない文字を見ていくのですが、索引機能やその本に何が書かれているとかが簡単にわかって、横断的な検索ができれば、さらに広い分野に資料があるということがわかるとと思いますので、そこまで踏み込んだデジタルの資料を揃えていただくと、さらに園芸学の歴史の研究が進むのではないかと考えておまして、それを最後にお願いしたいと思います。

小林●今のことに関しては、國本先生専門ですよ。

國本●私の専門とする分野(図書館情報学)に「メタデータ」(注:「データ」についてのデータ記述)という考え方があります。…ほかに、たとえば田草川先生が先ほどちらっと見せてくださった、トリプルアイエフ(注:IIIIF:デジタルアーカイブの国際標準規格。画像収録された電子資料の部分拡大や、他の電子資料との比較を手軽にして、研究への利活用を促進することを企図した仕組み)のような仕組みを導入したアーカイブが増えたりですとか。最近ではデジタルデータも、そういう細かい詳細なデータをメタデータとしてとって読み込めるようにもしてあります。その、今までは、ちょっとですね…おそらく従来のデジタル化は「紙の資料をスキャンしました、はい終わり。」みたいなものが多かったのは、事実だと思うんですけども。現在は、それをきちんと、今おっしゃったような検索機能に対応しうるような「統一規格」で、世界中が同じ規格でやろうとしています。トリプルアイエフは、まさにその倉重先生のおっしゃる機能の具現化したものだと思うんですけども。それを、電子データを作って、さらに皆さんに「使いやすいように」「見やすいように」実装しようという動きが出始めています。…ただ、やっぱりそうになると、田草川先生のような「読み取れる方」と組んでそれ(メタデータの付与)を行うっていうことは必要になってくるので、そこは非常に重要だと思います。…実はその、植物学の場合、難しくて。例えば「採取地を書いていいの?悪い

のか?」とか「これは絶滅危惧種なのに出してしまっていていいの?悪いのか?」とか…実際に今起きているんですけども、その判断というのは、専門家の方たちと組んだ上で、あえてデータを消してる(見えなくしている)ケースもあったりするので、なかなか…ちょっと「できることとできないこと」はあるというのが実態なんです。今「鋭意努力中」といいますか、我々の業界の人間たち総出でやっている、っていうのが実は「現状」だと思います。

倉重●よろしくお願ひします。

小林●次、大野先生からアドバイスおよび注文、よろしくお願ひします。



大野●みなさんのご意見を伺って簡単にですが、メモとしてまとめてみました(図2)。今日の倉重先生のご講演はツツジを例に挙げていただいたと思いますので、ツツジを例に書いてみました。ツツジが突然変異をすると、その突然変異が発見されて、それがおもしろかったり綺麗であったりすると、そのことをみなさんが情報発信していきますよね。そうするとそれを知った人の中には、園芸利用してみたいという人がでてきて、その時にきっと名前がつけられているのかなと思います。名前がつくとさらに世の中へと伝播していき、その突然変異したものを絵画にしたり写真にしたりコミュニティが広がっていくわけです。栽培する人も増えてく



図2

れば、栽培法も確立していくであろうし、たくさんの方が栽培すれば当然また違う突然変異も起こるでしょう。そうするとまたその中には、変わった美しいものも出てきて、それがまた発信されていく。こうしたサイクルがぐるぐると回りだすと、一つの文化になっていくのだらうと思いました。

このことは、ツツジの突然変異でなくともいえることであり、「アカデミックリンク」ということを考える上でも参考になるかと思えます。つまりいかに発信、学習、共有というサイクルを動かせるかが大事なのではないかということです(図3)。何か発見したことや活動などを発信して、その発信された情報に出会い、その情報をもとに活動をする。そして、その活動を共有し発信をするといったサイクルです。こうしたサイクルがどんどん回っていくことで文化が醸成されていくのだと思えます。

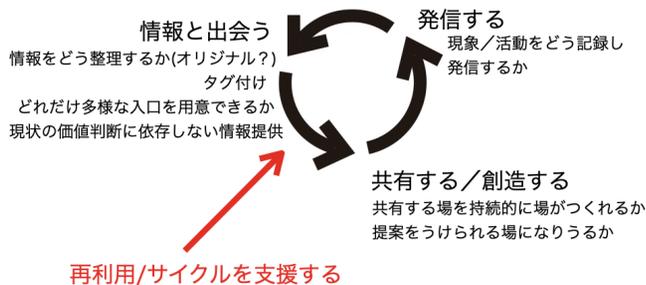


図3

そのサイクルをまわす上で課題だと考えているのは、発信です。私の所属する名古屋市立大学の芸術工学部も園芸学部と同じで、1キャンパスに1学部しかありません。他に4キャンパスありますが、他3キャンパスに比べると距離があります。そのような環境の中で感じている課題としては、発信というところです。芸術工学部は学際的な学部ですので、本当は他の学部の先生や学生と交えて意見交換や共同研究などができるとよいのですが、そういったことはなかなかできていません。発信といってもただ情報を流せばよいのではなく、読み手にわかりやすく発信しなければいけませんし、他の情報とのリンクも大事だと思います。そういったことをどうやって効率的に簡単に実施できるかを考えていかねばなりません。

先ほどのツツジの突然変異の例でも、どんどん「名前」がつけられていくことで広がっていくことをみましたが、情報を整理し発信する上では、いわゆるタグ付けというのが大事なのだらうと思います。なんでも「ググる」時代においては特に重要です。それはインターネット上に発信するだけでなく、インターネットにアクセスできない人も情報を受け取れ、また発信できるようにしなければならないと思います。どんな人にもアクセスしやすい場であることが、共有の輪をより広げることができると思います。最近の図書館をみると、単

なる書庫としての図書館ではなく、情報を通じた交流施設としての位置づけが強くなっているように感じます。千葉大学のこのアカデミックリンクも今後その輪が広がり、ひとつの文化が生まれていく場になるのではと期待しています。

小林●はい、どうもありがとうございます。特に発信が重要ですよっていう趣旨かと思えます。國本先生何かアドバイス、あるいはリクエストありますか。

國本●今の、大野先生のご理解、全くその通りだと思います。私の専門分野に「学術情報流通」という考え方があるんですけども、研究成果を論文文化して、発信して、さらにそれを再利用するという「一連のサイクル」があってはじめて我々の「研究」って成り立ちますよね。…実は大学図書館って、今までその、再利用のタネになるもの(研究成果)を一生懸命「蓄積する」ということに、割と注力してきたんですね。でも今後は、小林先生がおっしゃったように「それに出会う契機を作ったり、場を作ったり、機会を提供する」とことの方が重要だと思います。

最近の学生さんも、その…契機自体はいっぱいあると思うのですが。ただ「興味の持ち方(端緒)」に関して、結構不得手なときがあるので、「こういう興味の持ち方もあるんじゃないの?」っていう提案を、例えば専門の先生だったり、身近な大人と一緒にするって、すごく重要なことだと思います。それがあってはじめて、次のフェーズに入っていくところがあると思うんです。なので、これから大学図書館は…「図書館を取り巻く人々は」というべきかもしれませんし、あるいは「アーカイブしている我々は」というべきかもしれません。我々は「手持ちのもの(タネ)」をためておくんじゃなくて、「こういう再利用の仕方や、機会がありますよ!」っていうところまで、提案やプロポーザルができるようにならないといけないと思います。

そのときには「組織単体」での実行は確実に無理なので、周囲の力も借りて…それこそさきほど、お昼休みに登壇者の先生方と話したらものすごく面白かったんですけど、そういう方たちと「ワイワイしながら提案する」ところまでが「仕事」だと思っていないといけない。そう思います。

それともう一つ、「発信」のところですけども、最近ではフリーやオープンコンテンツが増えてきているんですね。若い人たちと最近、仕事をしていて思うのが、「それは再利用なのか、オリジナルなのか、何なのか?」、つまり、自分のしている行為や、使っている対象物の性質がわからないまま、コンテンツを「使ってしまう」ケースがすごく増えている気がします。それに必要な知識が…我々「教える側」にも足りていないがために、彼らにもちゃんと「教えられていない」ところがあって、これを「どこまでの範囲なら、何をし

ていいの？」。たとえば著作権に関する知識とか、意匠権についての知識とか、いろいろあると思うんですけど、そういうものをきちんと理解して、教えて、再利用のプロセスにまでスムーズにもってゆく支援が必要だと思います。教育者もですし…それをサポートしている教育・学習支援者である我々も、この辺の「再利用に対するサポート」が、次のフェーズで必要になるかなと思っています。

そういう「知識や配慮や敬意」が欠けていることに気づかないまま、勢いだけで何かを生み出していると、結果的にはサイクルが途切れちゃう可能性が高いので、今、先生がおっしゃったまさにサイクル図なんですけど、「契機を持たせる」支援から、さらに「生み出した相手を尊重しながら楽しく“使う”」という再利用まで、次のプロセスへとつなげる流れを、図書館とかアーカイブズとか、研究者自身が「知識を持って、自ら回していこう」と思っていないと、その次のフェーズで、いろんな文化を生み出す方向にはつながらないかな、という気がしています。

小林●はい、どうもありがとうございます。田草川先生は、さっきトートバックの提案をしていただきましたけど、それ以外のことで何かご提案あるいはアドバイスがありましたらよろしくをお願いします。

田草川●先生方のご提案と違って私からは、大変地味な、厳しいお願いになってしまうと思うんですけども、今はどんどんデジタル化を進めてらっしゃると思いますし、もうすでに公開されているものもあると思うのですが、資料に優劣をつけないでほしい、ということです。どうしても、展示に出したから先に、とか、有名だから、きれいだから、というように、ここだけというわけでなく、どの所蔵機関でも、たいていまとまった資料の一群があると、いいものから紹介されていくんです。そうすると地味なもの、訳の分からないものっていうのがどうしても残されてしまいます。そして、予算の問題もありますね。デジタル化するための予算が限られていると、最後に残ったものは、死蔵されてしまうということもよくあります。ですがそれはやっぱり不遜なことで、資料の価値っていうのは、今決められるものではない、と思います。むしろ先ほどの国文学研究資料館などで公開されて、そして誰かが価値を発見してくれるかもしれません。みなさんもご存じの通り、江戸時代の版本は、まだまだ翻刻が進んでいなくて、活字化されない未翻刻のものが山のようにあります。自分でも、専門のものを一生懸命翻刻しているわけなんですけれども、意外と卒業論文で、やる人がいないんだったらや

りたいってことで、くずし字を勉強している学生が翻刻をすることもあるんですね。そうすると、たくさん資料が公開されていけば、例えば園芸学部の学生と文学部の学生が組んで、何か一つの園芸書を研究しようってことも可能になると思うんです。そういう材料を、立派な研究がなされている資料だけではなくて、有象無象のものも含めて、すべてさらけ出すというか、提供していただきたいという気持ちがとてもあります。それと、私は前に少し国文学研究資料館で仕事していたんですけど、歴史的典籍の研究事業で、まさにタグ付け作業をやっています、例えば古典籍の中から犬の絵があると全部タグ付けして、それで検索すると、ずらっと全部犬の絵が出てくるんですね。それが園芸の植物でもできたら楽しいな、と思います。それで、さきほど倉重先生がおっしゃっていたようなことにも応え得るかな、というようにも思いますので、まずはデジタル化して提供して、より広く、内部だけではなく外部の世界にも開いて、多くの知見が集まってくるのを待つ、というのをしてもいいかなと思います。

あと最後に、いつも最後に余計なことを言いがちなんですけど、大野先生のお話を聞いて思ったんですが、松戸分館の前のスペース（緑のテラス）でパフォーマンスができないかなと思ひまして、特に園芸学部らしさで考えると、五穀豊稔の神事、お祭りの舞とか、そういうものをあそこで何かやったらいいんじゃないでしょうか。あの空間でパフォーマンスをして、それでみんなが集まってそれを見る。そういうことにも向いている、素晴らしい舞台になる空間だなと思いましたので、ぜひご検討いただけたら嬉しいです。以上です。

小林●わかりました。最後の提案は、今後実演も含めて、先生にもご参加いただけるとありがたいと思います。それではそろそろ締めたいと思うんですけども、私、今日講演会やらせていただいて大変よかったなと思います。実は、園芸学部で園芸文化を研究している教員は現在いません。それぞれ植物の遺伝・生理・生態だとか社会科学的なことをやっている人はいるのですが、文化をトータルでやるとなると、応用学部では研究しにくい。倉重先生も関連したことをおっしゃっていたと思うんですが、意識してこういう場を作ることが大事な、図書館がそういう役割を果たすというのは意味あるのではないかと思います。ぜひこういうふうな集まりを次回はオンラインじゃなくて対面で、あるいは緑のテラスなどオンラインでやりたいと思いますので、今後ともご協力ご支援いただけるとありがたいです。どうもありがとうございます。